

ジョーンは永遠に

ガンと闘った夫婦の愛と死

エリック・ロビンソン

早川与志子訳



永遠に

ガンと闘った夫婦の愛と死

エリック・ロビンソン

早川与志子訳



ジョーンよ永遠に

——ガンと闘った夫婦の愛と死——

定価 一二〇〇円

昭和五十五年九月三十日 第一刷発行

著者 エリック・ロビンソン
訳者 早川与志子

省
略
検
印

発行者 石川晴彦
株式会社 主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一―六 郵便番号 一〇一

振替 東京二―一八〇番

電話 東京(〇三)二九四―一一一(大代表)

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、
おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお
申してください。

印刷所 大日本印刷株式会社

© Eric Robinson 1980 Printed in Japan
0098 - 911368 - 3062

亡きジョーンに捧ぐ

ジョーンよ永遠に——ガンと闘った夫婦の愛と死——

目次

第一部 ジョーンを語る

追憶……………	7
少女時代……………	15
出逢い……………	25
結婚……………	35
家づくり……………	44
小康……………	53

第二部 エリック・ロビンソンの日記

61

葛藤……

63

苦悩の日々……

110

暗転……

222

エビローグ——一九八〇年——……

259

死への挑戦——『ジョーンよ永遠に』を見て——水野 肇……

267

訳者あとがき……

273

文中の主な登場人物

エリック マサチューセッツ大学の歴史学教授。著者。

ジョーン エリックの妻。必死にガンと闘う女性ジャーナリスト。

ピーター・モズデン ポストン大学病院腫瘍科の医師。ジョーンの担当医。

メアリー・フェルドハウス・ウェーバー ジョーンの友人で衝撃的テレビ・ドキュメント映画『ジョーンよ永遠に』の製作者。

ジョン・チャイルド メアリーの友人でメアリーと協力して映画製作にあたった。

シェリー エリックの先妻の長女。

サラ エリックの先妻の末娘。

ピーター シェリーの夫。

サラ エリックの孫娘。シェリーとピーターの娘。

レオ・ネ叔母 ジョーンの母方の叔母。

アレクサ ジョーンの親友。

ベス・ラービンジャー ジョーンの女友だち。

デイスカラス夫妻 ジョーンの友人。

ジャンカーラ ジョーンの友人。

ロバート・マギー ジョーンの友人で弁護士。

ジョディ・パメリー ジョーンの看護婦。

リタ・マニング ジョーンの看護婦。

ウィル・レール 映画の撮影スタッフのひとり。

第一部 ジョーンを語る

追憶

ジョーンに彼女自身のことを書かせたかった。なにしろ彼女はハイスクール時代からジャーナリストだった。いまでも彼女の書いた記事、フアッション・ノート、それに家庭の主婦、芸術家、教師、作家など多くの人とのインタビュー記事が、何十冊ものスクラップブックとなつて家中にいっぱいある。マサチューセッツ州スプリングフィールドにある彼女の母校で発行されている『クラシカル・レコーダー』という学生新聞に、ジョーンが寄稿したもののコピーもいくつかある。宿題で苦しんだこと、放課後まで残されたこと、無断欠席をしたこと、それに、戦争中首尾よくナイロンの靴下を一足手に入れたことなどを書いたものだ。

後年ジョーンは『セブンティーン』誌、『ウイミンズ・ウエア・デイリー』紙、『ポストン・ヘラルド・アメリカン』紙の記者になった。過去に彼女が書いたものはひとつ残らず残っているのだが、彼女自身のことを書いたものはほとんどない。どういう苦痛に襲われたとか、どんな薬を飲んだとかいった病床手記、また医師、看護婦、薬剤師、救急車、ホームヘルパー、ガン協会、そのほか彼女の病氣や臨終のときまで色々力を貸してくれた人たちの住所や電話番号の走り書き以外にはなにも残っていない。彼女はしょつ中メモを取っていた。手にペンを持っていることのほうが多かったくらいなのだから、自

分のことを書いた本を出していくれたら、自分のことを書いておいてくれたらよかったのだが。せめて卵巢ガンの最初の診断が下されたときに、筆を取っていさえしたら、つまり建築でいえば基礎工事を始めてくれていたら、私がそのあとを引き継いで建物を建てることができたかもしれないのに。彼女の設計したもの、彼女の集大成したもの、彼女のゴシック大伽藍のごとき闘病の記録を私が受け継いで、それを完成に導くことができたかもしれないのに。私の目の前に置かれた基本設計図に従って、石をひとつひとつ積み上げるのが、職人たる私に残されたただひとつの仕事だったからだ。

ジョーンの母親も、彼女がわずか十六歳のとき、おなじ卵巢ガンで死んだが、せめてそのときからでもジョーンは苦しみに満ちた彼女の物語を書き始めていればよかったのだ。それとも、彼女がマウン・ハリヨーク・カレッジの学生で、夜の居残り授業のとき、ごく当然の恐れだが、自分の母親とおなじ死に方をするのが怖いと語ったあの頃から筆を起せばよかったのだ。ニューズ・ウィーク誌に載っている一葉の古写真の助けを借りて、私はその頃のジョーンの姿をまざまざと心に描くことができる。短い純白のソックスをはき、内巻きのカールがほとんど肩のあたりまでかかっているふさふさとした髪を持ち、顔には晴れやかなほほえみを浮かべた彼女が一冊の本を読んでいるのを、ふたりの級友が聴いているところだ。この本こそ彼女自身を語った本、彼女が書き始めていなければならなかったはずの本かもしれない。しかし、私の手許に残っているのは、若い頃のジョーンが自分の欲求不満と自信喪失を告白した短い一節だけである。

「今夜のあたしはひどく滅入った気分だ。問題はこういうことだ……。ここであたしはなにをしようとしているのか、人生は落とし穴みたいなもの、ひどく退屈で、くだらなくて、それから色々。それ

だけじゃない、あたしの空っぽの頭に心理学というものを詰めこもうとしたけれど、大失敗してしまった。目下あたしは観察力の勉強をしているところだ。そして、あたしの頭が鈍いのだからもう一度二年級をやる覚悟はついている。それにしても、この科目はあたしには退屈だ。どの科目も全部おんなじように退屈だ。人生一般が退屈であるとおなじように。今夜は、なにか音楽作品を作曲しているような、素晴らしい絵を描いているような、アメリカの大小説を書いているような気分だ。そんなことはできないけれど。あたしはうじ虫より能がない。自分が能なしとわかるだけの脳味噌しか持っていない……」

ジョーンがマウント・ハリヨーク・カレッジの校舎に放火しようとして、停学を食ったとしても不思議ではなかったろう。そう、彼女は書き始めなかったのである。そして、病気が重くなると、自分のことを書くことなどいよいよできなくなった。読者のために、病気に罹っていたあいだのジョーンの生きざまと、彼女が持っていたきわめて人間らしい生き方をしていくために必要なエネルギーを、そっくり再現する筆力が私にあるかどうかはわからない。

ジョーンの社会生活はすこぶる活動的だった。現代のアメリカ合衆国では友人と交際を保つていくだけでも実に多くのエネルギーを要するということが忘れられがちだと思う。まして自分が働いておらず、オフィスや工場で友人たちときまって会う機会がない場合にはなおさらである。たとえばジョーンが死んだあと、私はかなりたくさん彼女の彼女の友人に会おうと試みたが、日が経つにつれて彼らと会いくなくなっていくのに気づいたのである。向こうか私の、どちらかが忙し過ぎたためでもあった。どちらかが興味を失ったためでもあった。またどちらか一方の悲嘆の情が強すぎたためでもあった。また、人

は時としてなにか新しい色恋におぼれて、一時的にせよ夢中になってしまふことがあるが、そのためでもあった。ところがジョーンはどうであつたかといえば、彼女は友人たちとの交友を深めるのにきわめて良心的だつた。どの友人とも一週間も連絡しないということはなかつた。日曜日は電話のお喋りにあてられた。背中にあてがつた枕に寄りかかつてベッドに坐り、友だちと生き生きと喋つていた彼女の姿がいまでも眼に浮かぶ。心から面白そうな笑い声をたてる、馬鹿笑いするときもあった。相手にもおなじような体験があつたということがわかると、眼が輝き、身体全体でそうだそうだとうなずく仕草をする。まるでその友人が部屋にいて顔をつき合せて話をしてゐるような様子だつた（ジョーンは彼女が生きていた世界を動かしていた発電機みたいな人間だつたのに、例のテレビの専門家と自称する連中が、ジョーンは孤独だつたなどと言うのは実に不思議だ）。

私は大人になるまであまり電話を使わなかつたので、いまでも電話で話すと、かならず妙にすました話し方になる。大抵のアメリカ人とおなじく、ジョーンにとって電話とは、彼女自身の身体の器官の延長のようなものだつた。

友人以外にも用のある人間の所へはさかんに電話をかけた。大工、ペンキ屋、カーテンや椅子カバーなどの室内装飾屋、指物師、額縁屋、ランプ屋など家の飾りつけでジョーンを助けてくれた人たち、ドラッグストア、外科用医療器具のセールスマン、保険屋、外科や内科の医師、看護婦、精神科の医師など彼女の治療に手を貸してくれた人たち、経理士、弁護士、図書館の司書、製図機械屋など彼女の財政上の問題を解決するのを助けてくれた人たち、それから私たちの生活をいつそう惨めなものにしてくれるよりほかに能のなかつたお役人たちなどが電話のかけ先だつた。なにしろジョーンは、もとジャーナ

リストだから、情報をたしかめるのにさかんに電話を使った。情報をたしかめる名人だった。そうえ、彼女は絶えず疑問を感じて質問を発する精神の持ち主であって、電話を入口にして外の世界に入っていた。電話によって彼女はそのときどきの社会情勢に応じたアイデアを考え出し、人が死に近づいたとき心を占める恐ろしいほどの寂しさから自分を救う手段としたのだ。こうしたわけで、ジョーンは自分の印象を書きとめておく時間がないほど生きることで手いっぱいだったのである。

それに、きれいい好きという彼女特有の問題があった。そのためにどれほどの時間が費されたかはこの本に書いてあるとおりだが、ジョーンがどれほど清潔を保つことにうるさかったかを、きれいい好きな暮らし方をしたことのない人にそのまま伝える筆力は私にはない。私が時々感じたことだが、ジョーンは病気のことを、身体から洗い落とさねばならない染みか穢れ^{けがれ}みたいなものと考えていた。こういった考え方は私たちの多くにとって別に縁遠いものではなく、神経質といえるほどのきれいい好きや病的なきれいい好きでなくても、このような病氣観を持つことはよくある。

とにかく彼女は生まれつきこざっぱりとしたきれいい好きな人間だったから、いやな臭いや汚れにはとても気分を悪くした。ジョーンとの二年間の結婚生活で、彼女が大小便のあと始末をしているのを傍で見、また手伝えるときは手伝ったが、私は彼女ほど熱心にはやれなかった。病状がひどく悪くなって、ジョーンの身体から絶えず排出物が流れ出し、内臓のすべてが非常にゆっくりと、しかし冷酷な速度で溶け始めたのではないかと思われた頃には、とくに大小便のあと始末に熱心だった。おそらく、私がやっていたことなどは、世の母親、あるいは看護婦のだけれもが毎日やっている仕事の一部分みたいなものだ、言われるかもしれない。もしそうなら、弁解はしないつもりだが、私だって娘たちが小さかった

頃、自分に割当てられた分はおしめの洗濯をちゃんとやっかし、娘たちの身体の具合が悪かったときは、そのあとを追いかけて大小便の始末ぐらいはいつもしていた。まだある。病気のジョーンの排泄物は健康な身体から出る排泄物とは違って、絶えず病毒に冒されているという兆候なのだ。大小便が身体の通常の排泄口を通して出てくるのではなく、不自然な裂け目から無理に外へ出される。また、排泄物が通常とは異なる管へ流れこむので、たとえば直腸は膈の一部分となり、そこから出る排泄物はかならずといってよいほど、ただれと出血と悪臭のある粘液を伴う。ジョーンはきちょうめんできれいな女性だった。世間から、自分がだらしない女と見られるのに耐えられなかった。だから、自分を清潔にすることに多くの時間とエネルギーを費したので、日記など書く暇はまったくなかったのである。

最初は私も自分の日記を書きながら、ジョーンも日記をつけるようになってくれれば、おなじひとつの出来事についてふたりが抱いた印象を比較できるのではないかと期待した。あの頃の私は自分の気持ちを楽にするために日記をつけていたのである。ジョーンや友人には打ち明けられないようなことはなんでも日記のなかにぶちまけて、怒りや恐怖、欲求不満、またたぶん自分に対する憐れみの気持の捌け口を見つける必要があった。公表するつもりではなかったが、おそらく歴史のために、私たちの生きていた時代の野蠻な状況を、未来の歴史学者たちが研究するときの書庫の一資料とするために、私はこの日記を書いたのである。日記を書きながら私は、いつの日か私の親友のひとりかふたりか、あるいは私の娘たちか、娘の子供たちがそれを読んでもくれることを想像した。全身がまったく疲れ果てて眠れなかったときに書いたこともある。瀬戸物を壁に投げつける代わりに書いたこともある。私はもの書きであるうといつも努めているので、時には日記の表現が文学的になっていることもある。だが、同時に日記の

文章がすこぶる堅苦しく繰り返が多いのは、あの頃私が昼と夜のあいだに体験したことを鏡に映すうになにひとつ修飾を加えずに書いたためであることも承知のうえだった。

読者を退屈させないようにする必要は一応別としても、文書による誹毀罪^{ひき}という法律があるから、この日記を伏せ字なしのそのままの形で公表するわけにはいかないのです、伏せ字のない全文のものは私の家族にだけ見せることにした。だが、例の映画（訳注「テレビ・ドキュメンタリー・フィルム『ジョーン・ロビンソン——ある女の物語』」へ邦題「ジョーンよ永遠に——ガンと闘ったある夫婦の二十二月」のこと。ジョーンの病室にテレビカメラを持ちこみ、ガンとの闘いを克明に描いたこの映画は、そこに含まれる多くの問題提起と、「映像による遺書」といういわばセンセーショナルな形をとったことにより、大きな反響を呼んだ。米国では一九八〇年一月にPBS〈全米公共放送〉から、日本ではおなじ年の五月に日本テレビ放送網を通じて放映された。この映画製作のいきさつについては、本書でも詳しく説明されているし、本書とこの映画とは不可分の関係にある）のサブタイトルが「ある女の物語」であるならば、この私の日記は「ある男の物語」として提供するかけがえのないものである。

彼女が死んで五年経ったいま、日記を読んでもみると、私は日記のなかで妻に対して不当な仕打ちをしたことを認める。彼女の病苦に対する私の応え方には、辛抱強さと同情を欠いたことがままあったからだ。私の日記は、ジョーンの私に対する注文が度を越えていたという印象を与える恐れがあるが、はつきりとさせなければいけない点は、実は私の辛抱強さなどたかが知れたもので、しかも月日が経つにつれ、それがひどくなったというものである。私は自分自身の気持で手いっぱいになっていて、妻の気持を思いやってやるのに十分な時間をかけないことが多かった。

だが、この日記は私の物語であって、ジョーンの物語ではない。ジョーンに対する私の気持を表現することと、ジョーンに自分自身を語らせるというもつと難しい課題、つまり私の言葉によつてジョーンの個性を輝かせ、読者の心をつかまえてしまうという作業とを取り違えたわけではない。ただ私にはうまく書けなかったというだけのことだ。ジョーンを眼の前に眺めながら書いていたときには、彼女の姿をそのまま描けばよく、別に作為を施す必要はなかった。多くの人がそうだと思うが、もちろんその當時も自分が結婚した相手を私が十分に知っていたわけではない。ジョーンが本当はどんな人間かということがわからず、苦しんだこともあった。私にとつては常に、ジョーンはいぶかしさとをこめた驚きが入り混じった対象だった。こうした私の疑い惑う気持は今日まで続いている。だから、ジョーンの片鱗をうかがわせるような断片的な描写をすることはあつても、私はジョーンの全貌を与えようとする試みは一度もしなかった。私の使っている言葉がジョーンの言葉であるはずのことは承知している。彼女はアメリカ人であり、私はイギリス人なのだ。彼女の生気潑刺とした個性、機知、軽妙な文章には適わない。いわんや、彼女の気持を表現する筆力など私にはとてもない。それどころか、彼女の気持がどんなものなのかわからなくて途方に暮れたことさえ再三ある。ジョーンは、まだ生きていた頃も、まだ死んでしまった現在も、根本的には、わからないところの多い人間なのである。

それにしてもこの日記には、私たちふたりが分かち合つた生活のなにかが描かれている。言葉に書くこと例の映画ではなし得ないようななにかを表現できる。とりわけ、歳月の遷り変わりを文章で書くと、たしかな印象を与えることができる。私は、自分がジョーンの夫として、友人として、また看病した人間として、彼女が病気のあいだ中、そして死の瞬間をどんな気持で生き抜いたかを伝えてみた